

親鸞仏教センター通信

2003.
September

2003年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第7号

共通の問い

親鸞仏教センター研究員 田村 晃 徳

先日、ある講演会に参加した。講演会は、異なる分野で活躍される方々と出会える大切な機会なので、時間の許す限り積極的に参加し、講師とも交流するようにしている。その日は「子どもの虐待防止」に関するものであった。講師は「子どもの虐待防止センター」(東京都世田谷区)の理事ならびに相談員をされており、実際に虐待を抱える家族とも会っておられる、いわば臨床に携わっている方である。

講演では子どもの虐待に関する理論面だけではなく、相談員をされている講師ならではの多数の具体例が語られ、そのいずれもが印象的であった。しかし、私にもっとも印象深かったのは、講師の「子どもの虐待防止」に取り組む姿勢である。「今までにも数多くの虐待に関する相談を受け、ケアもしてきたのだが、『果たして、あれでよかったのだろうか』という自身への問いが常にある」のだとおっしゃっていた。講師のそのような問いが、なぜか私には残った。

私たちは「答え」がほしい。「答え」がないと不安で落ち着かず、前に歩めない気がする。それは「答え」を目の前に見いだすことにより、自身を納得させようとしている、とも言えるだろう。しかし、私たちを歩ませるものは、実は眼前に見つけようとしていた「答え」ではなく、背中を押してくれるような「問い」なのではないか。

先の講演においてもそうであった。多くの体験から、結論を出すことも大切な一つの方法であろう。しかし答えを出して、そこに自分を納めるのではなく、常に問い続け、虐待という現場に向かおうとされる講師の姿勢。そこに私は感銘を受けたのである。もちろん、今回の講師の方が虐待の問題を通じてであったように、問いの最初の形はその人の状況によってさまざまであろう。しかし、最後は「人間とは何か」、そして「私とは何か」という問いへと帰着するのではないだろうか。

人間に出会いつつ、問いを持ち続け、思索する人々がいる。そのような人たちとは、たとえ専門の領域は異なっても、その見つめている先が人間の問題である以上、仏教、親鸞の教えとどこかでつながりを持つ。講演終了後、講師の方が『アンジャリ』(親鸞仏教センター情報誌)を喜んで受け取ってくださり、「仏教に興味がある」と私におっしゃられたのは、決して偶然ではないだろう。共通の問いが仏教と現代の人々を結ぶのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 浄土こそ一人ひとりを目覚めます大地

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第15回から第17回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第15回では浄土の雨について、第16回では浄土の光について、第17回では浄土の声について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第13回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 浄土の大地

親鸞聖人は、「大地」という言葉を、比喩的に本願のはたらきとして語られる。われわれは、自分で自分の地面に立ち上がろうとするけれど、清沢満之先生は、われわれが立っている地面は、あたかも浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするものの如しとおっしゃった。まあ孫悟空ならできますけれど、われわれは、浮き雲の上であればずっと落ちてしまう。これは不安定さを象徴しているのです。今の状況が落ちこちていってしまうという不安感です。本当に立って大地がわれわれにはない。自我を立場にして大丈夫だと思いたいけれども、この自我なるものは苦に責められるし、大体、自我自身が思うままにはならないのです。

この世の中は、わが思いのままになるものは一つもないといってもよい。そういう苦悩の身は、実は大地を持っていないからだという。本来の大地があるのに、逆立ちしていて見えないわけです。そういうふうに教えて、私たちに目^め覚めよと呼びかける。われわれは逆立ちした地

面に生きている。それを^{ひるがえ}翻せば、そこは浄土を感じる場所になる。浄土の大地とは、われわれの真の大地なのということなのです。

■ 死んでからの救いへの疑念

浄土をどういう形で人間が知ることができるかというときに、浄土が単に向こうにあって、ことと違うところなら、向こうに行かなければわからない。だから、浄土教の教え方を文字通りに理解しようとした伝統では、人間がここで生きている限り、己^{おの}が罪を抱え、凡夫として逆立ちして生きていますから、どうしてもたすかからない。たすかからないから、死んで彼の土^かへ往けると理解しようとした。彼の土は、きれいな美しい世界、素晴らしい世界ですよ。そうすると、死んだら往けるのだという^{はかな}儚い望みを未来に託して、今に賭けていくしかない。だから、念仏したらたすかるよ、浄土へ往けるよ、でも本当かな、と思いながらも念仏を称え続ける。そういうのが浄土教の信仰の形であった。早く死んだら浄土へ往けるだろうというので、念仏しながら西へ西へと歩いて行って、海の中に入って浄土に往ったなどという伝説がたくさん生まれてくるわけです。

そういう信仰のありかたに対して、親鸞という人は、深い疑念を持たれたのだらうと思うのです。つまり、人間が自分でたすかりたいと思ってたずねていくが、どれだけたずねても救いがない。だからといって、死んでたすかるという保証はどこにあるのか。そういう不安感ですね。死んだらたすかると素朴に信じられるのであれば、親鸞という人はあのような面倒なお

仕事はされなかったでしょう。『教行信証』は、読んでも読んでもよくわからないような深い問題をはらんだ書物です。では、なぜこのようなお仕事をされたのか。そこには、現在の罪の身と未来の救いの身とが、どうして一つに成りうるのかという思想的な課題がある。そして、仏教の教えをとことん学んできた身として、仏陀の救いというものに出遇うならば、それは今ここにあるはずだと。死ななければ救いに触れられない、というようなことを仏陀が教えるはずがないと。そういうたずね方が根源にあったのでしょう。

■ 現生不退

親鸞の思想の一番の核にあるのが、「^{げんししょうふ}現生不退」という言葉です。今、この人生を生きながら、もう退かない、もう転ばないという確信です。如来の回向、^{いちによ}一如からはたらきというものをいただければ、現生に、ここに救いがくるのだと。しかし、煩惱を起こさないという身になって、そうなるのではない。毎日、腹を立てたり欲を出したり、失敗したり悩んだりしながら、その生活の全体を支えているはたらきを信ずるのです。人間は、ふつう苦悩が無くなったのが救いだと考えるけれども、そうであるなら死ぬしかない。苦悩があつてよい。そのまま、まかせなさいという呼びかけです。そういう如来のはたらきを感じ取れば、苦悩があることが縁となって、この人生が歓びに転ずる。不退転をいただければ、それが人間として生きる起点となり、それがそのまま救いなのです。

「南無阿弥陀仏」には自分の力はいらない。お前が自分で本来にもどれるはずはないのだと。お前はもう万歳すれば、そのまま本来に、もとにもどしてくれるのだと。比喩的に言えば、鉄棒につかまって、もがきながら逆さまになっているようなもので、力をぬけばひとりで大地にもどるのです。われわれはどんなことをやっても、この人生は自分で何とかするしかない。けれども、そういう生活の一点に、

根源的にまかせるしかないのだという智慧を持つか持たないか。そういう根源的なものとして、おまかせするという智慧が開かれると、楽になるわけです。不退転がこの世で与えられる。それが、親鸞という人の教えの持っているありがたさだと思うのです。

「絶対他力」と言うけれど、自分自身が完全にひっくりかえされるのが絶対他力です。自分が、もうどうにもならない愚かな身であるということが本当に見えた時、その見えるはたらきを教えてくれるのが他力なのです。だから、たすからない身だという^{きんげ}懺悔と、たすけずんば止まん、という本願の語りかけとはぶつかるわけです。それが南無阿弥陀仏という事実です。これは、一般論ではない。主体の事実です。一切衆生の大地となろうという本願を、私ひとりのためであったと引き受けたのが親鸞です。「^だ弥陀の^{ごこうしゆい}五劫思惟の願を^{いちにん}よくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」(『歎異抄』)と。

現代の状況を見れば、もう絶望的なところがあるけれど、そういう状況だからといって、一人ひとりのいのちがどういふに人生を感じて生きるのかという、その起点の問題は^{ないがし}蔑ろにはできない。ひとりでは何もできないかもしれないけれど、やはり一人ひとりが一番大事なのです。一人ひとりが、一人ひとりの世界を大切にしながら目覚める方向に歩んでいきたいと、こう念ずるわけです。(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講(無料)いただけます。なお、10月17日は、國府田隆夫氏(物理学者・東京大学名誉教授)、下田正弘氏(仏教学者・東京大学大学院助教授)をお招きし、「科学技術文明と現代の不安」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2003年 9月17日(水)午後6時30分～9時
10月17日(金)午後5時30分～9時
11月14日(金)午後6時30分～9時

場所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

現代と親鸞の研究会・第7回

生殖医療といのち

聖路加看護大学助教授 森 明子



森 明子氏

昨年（2002年）11月8日、東京新阪急ホテル（中央区）において、聖路加看護大学助教授の森明子氏を迎え、「親鸞と現代の研究会」を開催した。

ケアする側とケアされる側という両面から生殖医療の問題に取り組まれ、その問題をとおして人間としての生き方を問い続けられている森氏に、生殖医療の現状と問題を語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 生殖医療の現状と問題 — 患者と医療のズレ

百人に一人は体外受精で生まれているという時代になり、大変多くの人たちが不妊治療を受けておられますが、生殖医療に関するさまざまな問題点が指摘されています。

その一つとして、患者さんが医療に望むことと、医療が患者さんに提供しているものとのズレが挙げられます。誰も、初めから自分は不妊であるとか、生殖補助技術を受けようと思って病院には行きません。そのあたりを、医療サイドとしてはよく理解する必要があります。やはり、患者さんの立場に立ったガイドラインが必要だと思います。検査方法や手順を説明するだけでは不十分で、どういう検査結果が出る可能性があるのか、そして、結果からどういう治療があるのか、また、今後の見通しなどです。

精神的ストレスや時間的コスト、治療が生活に与える圧迫感などは、医学的知識を勉強するだけではわかりません。心理的な側面も踏まえ

ながら丁寧な対応が必要です。そういう意味で、看護者の責任は非常に大きいと思っています。

■ クライシスとしての不妊

人にとって、不妊とはどういうことなのでしょう。私たちは親になること、親になれる存在（parental identity）であるということを持っていますし、産む性、産ませる性を持った存在（sexual identity）であるということも持っていると思います。ですから、不妊によってそういうものが脅かされるということです。これは、人生における一つのクライシス（crisis 危機）になり得るということです。そういうクライシスの心理として、「何で、私たちがこういう目に遭わなければいけないのか」という怒りや悲しみと同時に、罪意識や孤独感が生じます。これらの感情が、うまく解決されていないとデプレッション（depression）、つまり、鬱^{うつ}になったり、コントロールを失ったりします。特に、不妊に特有なものとして挙げたいのが孤独です。人に話せないし、付き合いくらいということが出てきます。

それから、一番重要なのは、夫婦間の違いとかズレの問題です。子どもの誕生を望む気持ちの強さに違いが出たり、検査治療から受ける負担の差ということがあります。また、夫婦間で不妊治療に対する考え方や方針が違いますし、不妊に対する感情や対処の仕方も違います。さらに、相手に対する愛情や思いやりです。思いやっていて愛情があるのだけれども、そうではないというふうに相手が受け取ってしまうとこ

ろがあると思います。このようなところで、態度や行動やコミュニケーションにすれ違いが生じてくるのです。

■ 私の考える「不妊ケア」

生殖補助技術は、よく生殖の過程を分断し、分離すると言われますが、そのことによって新しいいのちが生まれてくるので、私は、この技術を「いのちを紡ぐ技術」であると思っています。技術それ自体は、極めて生物学的であるし、技術的な行為だと思いますが、それを受ける人にとっては、見事に人間性が疎外される問題をいくつも抱えていると思います。

それで、ヨーロッパの学会が最近、不妊カウンセリングのガイドラインを出しました。そこでは、「患者中心のケア」ということを述べています。医療チームのすべてのメンバーに、いつでも期待される心理社会的ケアとは、「患者中心のケア」ということです。「患者中心のケア」とは、患者さんが生物学的な存在としてだけではなく、一人の人間として理解されることを保証するということです。そのことが、医療者とのよいコミュニケーション、よい人間関係を築いていくと思います。

私の考える「いのちを大切にしたい不妊ケア」を三つ挙げたいと思います。まず一つは、人としての個人の歴史、人生の文脈を大切にすることです。そして、そこに人類の歴史も含めて、個人だけではなく、人間として綿々と繰り返されてきた生殖の営みということを考えなければいけないと思います。やはり、遺伝子レベルの問題もありますので、そういう意味でも、もっと長い目で捉えていく必要があると思っています。

二点目は、人と人との関係を大切にすることです。人と人という時には、まず夫婦です。不妊ということで、夫婦の関係が壊れるようなことがあってはならないと思います。それに加えて、生まれてくる子どもと親との関係です。夫婦だけの問題ではないということです。子ども

が絡んできますから、親子の関係も見えていかなければなりませんし、また、患者さんと医療者の関係も非常に大事です。

三点目には、ごく一般的なことも知れませんが、人の、物事を知る力、物事を行おうとする力、物事を感じる力を大切にすることです。特に、治療を受ける場合、女性が圧倒的に多いので、女性の力というものを大切にしたいと思っています。体の仕組み、あるいは治療の原理を知る力を患者さんは持っていると思いますので、患者さんに対する教育は、非常に重要だと思います。特に、不妊の治療は、意志決定ということがいつも付いてきますので、物事を決めていく、意志決定をしていく力をサポートしていくことも大切です。さらに、何よりもまず自分を大切にしてほしいということがあります。自分の気持ちを、そして、自分自身を大切にすることが、生まれてくる子ども、あるいは配偶者を大切にすることにもつながると思います。

(文責：親鸞仏教センター)

※森 明子氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第4号(12月1日号)に掲載予定です。

森 明子(もり あきこ) 聖路加看護大学助教授
1958年、名古屋市生まれ。聖路加看護大学大学院博士前期課程修了。1998～2000年度厚生科学研究「不妊治療を受けている患者・家族のための看護支援ガイドラインの作成とネットワークの構築に関する研究」主任研究者。1999年、日本不妊看護ネットワークを設立し、現在、代表を務められる。2001年3月、「不妊患者支援のための看護ガイドライン」を作成。著書に、『母性看護学概論』(医歯薬出版)などがある。また、『アンジャリ』第3号に「生殖医療といのち」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」(中央区の「東京新阪急ホテル」で)

いずれもいずれも、この順次^{③じゆんし}生^{しょう}に仏^{ぶつ}になりて、たすけそうろうべきなり。

わがちからにてはげむ善^{ぜん}にても
そうらわばこそ、念仏^{④えんぶつ}を回向^{くわう}して、父母^{ふも}をもたすけそうらわめ。

ただ自力^{じりき}をすてて、いそぎ浄土^{じやうど}のさとりをひらきなば、六道^{ろくどう}四生^{しやう}のあいだ、いずれの業苦^{ごうく}にし
ずめりとも、神通^{じんずう}方便^{ほうべん}をもつて、
まず有縁^{⑤うえん}を度^どすべきなりと云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)



きよう。

しかし、自分の努力でなんでもでき、ひとを愛せ
ると思っている心に絶望して、すみやかに弥陀の本
願の広大な智慧をいただくならば、その智慧のは
たらきによって、どのような苦悩多い境遇に埋没し
ている存在であつても救われるのである。

語 註

①【孝養】もとは親孝行をあらわし、ここでは亡き
親への追善供養を意味する。

②【世々生々】過去から未来へ受け継がれていく、
広く深いいのちのつながりをあらわす。

③【順次生】現世の凡夫の生に對して、やがて成仏
する可能性を「次の生」とあらわす。

④【回向】自らの功德を他のものに振り向けること
をいう。ここでは自力の回向をあらわす。

⑤【有縁】親鸞聖人の用語例として、『讃阿弥陀仏
偈和讃』には「仏慧功德をほめしめて 十方の有
縁にきかしめん 信心すでにえんひとは つねに
仏恩報ずべし」とあり、「有縁」を「十方の衆
生」と了解した。

(訳・語註：親鸞仏教センター)



私の二冊

(櫻井智浩)

『クラッシュ』

絶望を希望に変える瞬間^{とき}

太田哲也著 (幻冬舎文庫)

宗教書を「人生という難問に真向かいに
なり、自分の生きる意味を真摯に尋ねて
いったもの」とするならば、本書は間違い
なくそのひとつである。

著者は、カーレーサー。レース中に多重
衝突事故に遭遇し、死線をさまよう。体表
の六〇%が焼け焦げた身体を抱え、迷いな
がらも苦しみを引き受け、凝視し続ける。
壮絶な経験を、単なる体験談に終わらせ
ず、その意味を自分自身の言葉で綴ってい
く。無宗教を自認していた男の紡ぎ出す言
葉が、重い宗教的意味を持ってわれわれに
問いかけてくる。「クラッシュ」したもの
の正体とは。その確かめを通じて見出され
た「生きる意味」とは……。

二〇〇三年六月、本書は映画化され、上
映された。次作も出版が予定されている。
「生きる意味」の探求は、著者、そしてわ
れわれにとつても、今も続いている。



『聖典』の試訳（現代語化）

現代語訳作業をしているときに、いつも思うことがある。それは、『歎異抄』の言葉が、どのような場面（シチュエーション）で発せられた言葉であるのかということである。「親鸞は父母の孝養のためとて……」という言葉が、何人の聞き手の前で発せられたのか。どのような場面だったのか。この言葉は、聞き手の問いに応答したものではないのか。

問いの部分は書かれていない。しかし、確かに問いがあったはずである。その問いとは、どのような問いであったのか。その問いの深さとわれわれのレベルが共振したときに、応答として、言葉の意味が開示されてくるのであろう。その問いを提出した聞き手とわれわれのレベルがシンクロしたときにだけ、『歎異抄』とわれわれは「二人称の関係」に入ることができるのである。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第五条〉

原文

親鸞しんらんは父母ぶもの孝養①きようようのためと

て、一返いつべんにても念仏ねんぶつもうしたるこ

と、いまだそうらわず。そのゆえ

は、一切いっさいの有情うじようは、みなもつて

世々②せせ生々しょうじようの父母兄弟ぶもなり。

現代語訳

私〈親鸞〉は、亡くなった父母への供養のために念仏したことは、いまだかつて一度もない。その理由は、いま現に生きとし生けるものは、あらゆるいのちとつながりあって生きる父母兄弟のような存在だからである。

どのような存在であろうとも、やがて仏の位に到ったときには、だれをも救済することができるのである。

もし念仏が自分の努力でおこなえる善行であるのなら、念仏を振り向けて父母をたすけることもで

親鸞仏教センターの動き

(2003・6～8)

■2003年

- 6・1 情報誌「falan」第5号、研究誌「現代と親鸞」第3号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第6号を発行。親鸞仏教センターのホームページを開設。
- 6・9 第65回研究会。以降、13回の研究会を開催。
- 第20回英訳「教行信証」研究会。以降、5回の研究会を開催。
- 6・13 親鸞聖人ご命日のつどい
第24回聖典の試訳「歎異抄」研究会。以降、4回の研究会を開催。
- 第17回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6・16 第12回清沢満之研究会。以降、2回の研究会を開催。
- 7・1 人事発令（中津功禰託研究員が再任）
- 7・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7・12 櫻井智浩研究員学会発表（「人菩薩行論」の研究―大乘仏説論を中心に―、真宗教学学会・大谷大学）
- 7・23 現代と親鸞の研究会⑤「老人介護と子育て」理学療法士・生活とリハビリ研究所所長・三好春樹氏（文京区・東京ガーデンプラザ）
- 7・24 第18回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 8・1 人事発令（武田定光禰託研究員、本多雅人禰託研究員、越部良一禰託研究員、新田智通禰託研究員が再任）
- 8・8 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8・21 第19回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 9・1 「親鸞仏教センター通信」第7号を発行。人事発令（常塚聰禰託研究員）

現代と親鸞の研究会・第8回

いまの家族、これからの家族

安田女子大学教授 春日キスヨ



春日キスヨ氏

2003年2月12日、東京ガーデンパレス（文京区）において、社会学者の春日キスヨ氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

春日氏は、欲求が即座に満たされる今日の時代を「充足の時代」と押さえ、現代の若者の生きがたさやひきこもりの問題、さらに、超高齢者社会のなかでの介護の問題などについて、「家族」という視座で、一人ひとりがどう向き合っていくべきかについて、語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（藤原正寿）

■ 現代の若者の生きがたさ

現代の若者の生きがたさには、二つの側面があると思います。一つは、何のために、どこに向かって生きていけばいいのかという、目的や課題が見つからない生きがたさ。もう一つは、人とのつながりに確信が持てない生きがたさです。

多くの欲望が即座に満たされる現代では、自分の手が届かないものでないと、目標にならなくなります。非常に差異性の強いものしか目標になり得ないのです。モノが溢れる充足の時代そのものが、目的志向的・課題志向の生き方を難しくする側面を持っているのです。

だからこそ、人間関係の中で受け容れられることが非常に重要になってきます。本来、人間関係というものは、何かの目的や課題を達成するためにつながり合うときに、生き生きとする

ものです。しかし、受け容れられることそのものが目的とされるとき、関係に、過剰に敏感になり、傷つきやすくなります。過剰な自意識へのとらわれが、そうした中で強くなる。それが、若者たちの現代の状況ではないかと思われるます。

では、過剰自意識から解放されるためには、何が大切なのでしょう。「自分は自分であっていいのだ」というような、本来的な意味での自己肯定感が、非常に重要だろうと思います。

■ 「家族の危機」の本質

よく「家族の危機」というふうに言われますが、では一体、「家族の危機」とは何でしょうか。絶対的に受容されている自分、つまり、「自分は自分であっていいのだ」という自己^{ぜいじやく}感覚を培う基盤としての家族が、非常に脆弱化していることではないでしょうか。それは、親が子どもをかわいがらないからではなく、親が子どもを愛し、保護しつくす力を持ったがゆえの危機なのです。豊かな社会のパラドックスとも言えます。

学校化社会の親は、勉強ができる子は「よい子」という価値のみで子どもを評価し、「何の取り柄もないけれども、あなたが私たちの子どもとして生まれてくれたことがありがたい」といった形の、絶対的受容基盤を失っていきました。さらに、これだけモノが溢れる社会になると、教育熱心な親であればあるほど、かえって「子どもを甘やかしてはいけない」「我慢できる子に育てなくてはいけない」という、教育的な配慮が先に立つことになります。モノを一つ

買うごとに、「もう持っているのに」という否定形の関係をつくってしまいがちになります。

「買ってやりたい」からではなく、「のに」になるわけです。そうすると、モノを与えられる喜びは失われ、逆に、モノをねだるたびに「我慢のできない子」という形で、ネガティブなメッセージが子どもに伝わることになります。

また、豊かなモノ社会では、「勉強したら買ってあげる」というように、モノが子どもの心を操る手段として使われがちです。こうしてモノが溢れることで、かえって「ダメな子」という自己感覚や、「私は親から見捨てられるのではないか」という不安が、子どもに植えつけられていく側面があるのです。豊かな社会に育った子どもたちが本当に欲しいのは、実はモノではなく、親に自分が絶対的に受容されているという感覚なのです。そういう感覚や実感を子どもが伝えようとしても、なかなか親には伝わりにくいのです。日常的な、本当に私たちが良かれと思い、親の愛だと思ってつくっている教育的な配慮が、実は、子どもの自己肯定感覚の根元を崩していく側面を持っているのです。

■「これからの家族」—介護と家族—

豊かな社会に育った子どもたちが、親の介護を担わなければならない時代がこれからの家族になってきます。2025年には日本の人口の4人に1人が、さらに、2050年には約3人に1人が65歳以上の高齢者になると言われています。しかし今、それを支える家族基盤が大きく変化してきています。国の統計では、たとえ元気であっても、看守りが必要であろうと思われる85歳以上の年齢層で見た場合、1975年頃までは8割の人が子ども世代と同居するという形態でした。それが、年々同居の割合が減り、2010年には54.6%になります。シングルで生きる人も増えています。

さらに、高齢者介護をめぐる子どもの考え方も、1980年代半ばを境にして大きく変わってきました。それまでは、老人扶養についての考え

方は、「子どもとして当たり前の義務である」「よい習慣だ」という人を合わせると、過半数を超えていました。ところが、1980年代後半以降は、「施設・制度の不備ゆえ、止むをえない」「よい習慣ではない」という人たちが増える傾向にあります。

また、一人っ子・二人っ子世代では、次のような問題も出てきています。1960年代以降生まれでは、女性の4割以上が男兄弟がいないのです。女性たちは、夫の親以上に自分の親に対する責任義務を負わねばならない時代になっているのです。日本の伝統的家族であった「家」制度的なあり方は、人口学的にもその基盤を失い、夫方・妻方双方につながる双系的なものに変っていくと思います。

(文責：親鸞仏教センター)

※春日キスヨ氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第4号(12月1日号)に掲載予定です。

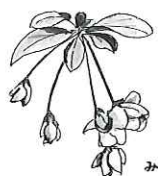
春日 キスヨ(かすが きすよ) 安田女子大学教授
1943年、熊本県生まれ。九州大学大学院教育学研究科博士課程中退。社会学(家族社会学、福祉社会学)を専門に、父子家庭、不登校、障害者、高齢者介護等の問題を追究される。著書に、『介護問題の社会学』『家族の条件—豊かさのなかの孤独。(岩波書店)』『父子家庭を生きる—男と親の間(勁草書房)』などがある。また、『アンジャリ』第4号に「豊かな社会と『家族愛』のパラドックス」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」(文京区の「東京ガーデンパレス」で)

● 清沢満之研究会報告 ●

清 沢 と 学 問



親鸞仏教センター研究員 田 村 晃 徳

「清沢満之研究『宗教哲学骸骨』読解」と題した研究会を2002年7月から毎月1回開催してきた。また、通常の研究会に加え、2002年12月には「清沢満之における『宗教哲学骸骨』の思想的意義」と題して東京経済大学教授の今村仁司氏を、また、2003年4月には「道理心と宗教的信念—清沢における哲学と宗教—」と題して大谷大学名誉教授の寺川俊昭氏を迎え、講義をいただいた。

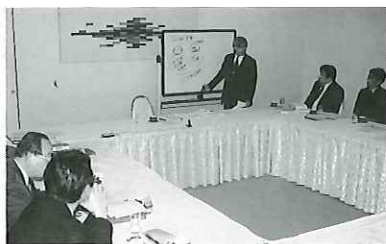
今号では、『宗教哲学骸骨』（以下、『骸骨』と略記）第一章「宗教と学問」の論点について、その一部を紹介し、第1回報告とする（出典は、『清沢満之全集』〈岩波書店〉とした）。



■ 宗教心の発達

各宗教間の差異について、清沢が言及していることが注目される。清沢は、「古今東西種々の不同あるは宗教心発達の差等あるによれる」（『骸骨』第1巻6頁）と述べている。つまり、宗教心の発達の点から、宗教の差異を理解しているのである。注意されるのは、清沢は当時の宗教学の理論も知っていたうえで述べていることである。イギリスの人類学者のタイラーが『原始文化』（*Primitive Culture* 1871年刊）で、宗教の起源として霊的存在への信仰（アニミズム）をあげ、その発達を記すことで、宗教現象一般の叙述を試みている。この本の原文の出版は、『骸骨』の出版に先立つこと約20年であるが、清沢はタイラーを引用している。

タイロル氏曰く「宗教は霊性的存在の信仰



今村仁司氏を迎えての研究会



寺川俊昭氏を迎えての研究会

也」と。（『宗教哲学骸骨講義』第1巻56頁）上の文章は、タイラーの原文では the belief in Spiritual Beings となっている。もちろん、清沢がどこでこの定義を知ったのかは定かではない。ただ、両者の記述が似ている点は、大変興味深い。タイラーは、宗教の差異が生じる理由をアニミズムの発達（the development of Animism）に求める。それに対し、満之は「宗教心の発達の差」をあげるのだが、これは英訳では the difference in the degrees of this development と記していた。清沢は、タイラーの説を参考にしたのかもしれない。いずれにせよ、清沢は当時の学問的到達点も踏まえつつ、自身の見解を述べていることは間違いない。現代においても、宗教多元主義に見られるように、各宗教間の差異の誕生をいかに説明するかは論議的である。満之の扱った問題は現代でも解決されていないのである。

■ 道徳心と信仰心

『骸骨』第一章「道徳と信仰」の箇所は、よく知られている。それは、清沢が信仰心に対する道徳心の優位性を説くからである。

若し道徳と信仰と違背することあらば寧ろ信仰を棄て、道徳を取るべきなり

(『骸骨』同前7頁)

『骸骨』の評価点として、常に指摘されるのが清沢の近代的側面、たとえば理性を重視する点である。それは、『骸骨』執筆時における清沢の思想の特徴を端的に示している。道徳心は、現代語における理性と一応理解できよう。理性の尊重は、近代の主な特徴であることはいうまでもない。では、ここまで清沢が道徳心を強く語るのはなぜか。今村氏は、講演において、清沢が当時懐いていた「仏教界への危機意識」をその理由にあげておられた。

上の点に加え、研究会で議論となったのは、清沢が道徳心の不完全性も表明していることである。それは、先の「信仰を棄て、道徳を取るべき」の一文に続いて次のように述べているからである。

然れども道徳は其性質不完全を免れざるものなるが故に人若し単に道徳の一方に固着すれば或は終に宗教の地位に達する能はざるやも保し難し

(同頁)

清沢は道徳の不完全性を述べ、同時にこれは「真理探究者の常に省察すべき所の一点」(同頁)だとする。これは他の著述でも触れている。宗教哲学とは、吾人の道徳心を以て、諸宗教の原理を研究する学也。(中略) 又宗教は信仰に基くものなれば、吾人の不完全なる道徳心を以ては、悉く宗教の全体を説明し得るや否やを保し難し。

(「宗教哲学骸骨講義」同前51頁)

宗教哲学の指摘について言えば、現代ではその役割は宗教学が果たしているといえるだろう。宗教学の立場、方法について議論がされている今、清沢が道徳心の不完全性から宗教研究の困難さを提起しているのは、先見の明があっ

たといえる。

もちろん、上で言われるような道徳心への指摘は、道徳心を否定するものではない。言い換えれば、道徳心への疑問ではあっても、不信ではないと言えよう。しかし、人間の理性が信憑^{しんぴよう}されていた近代において、理性を冷静に見つめる眼があったことは重要な点であろう。

実は、このような理性への疑問は、観念の中で誕生したのではない。それは、具体的な相手を、つまり、理性の危うさを体現している人々を念頭に置き、現実の状況から誕生したのであった。その人々とは、世の有識者、殊に仏説を否定する学者であった。清沢は、前述した『骸骨』本文「然れども、道徳は其の性質不完全を免れざるものなるが故に……保し難し」(『骸骨』同前7頁)の箇所に、次のように書き入れている。

世の学者多く、此理を了知せず。特に我国当時未熟学者、徒に地球説、進化論を提して、以て仏説を非難せんとす、大早計も亦甚しといふ可し。

(「宗教哲学骸骨自筆書入」第1巻37頁)

道徳心が一方的にはたらけば、それはかえって真理を見失うことになりかねない。そのような示唆を感じることができる。

寺川氏は、講演において、人間の思索の持つ「虚妄分別性」の反省が重要だと述べておられた。人間の持つ虚妄分別性を見抜いていたのは、仏教の大切な眼である。この指摘によると、なぜ清沢が、道徳心への冷静な眼を失わなかったのかについても、『骸骨』執筆当時、どれほど仏教を念頭においていたのかの再確認が求められるであろう。いずれにせよ、『骸骨』における道徳心についての満之の言及は、後の宗教的思索との関連も含め、大切な課題であることは間違いない。

※『骸骨』関連の図書に、『現代語訳 清沢満之語録』今村仁司〔編訳〕岩波書店、『現代語訳 宗教哲学骸骨』藤田正勝〔訳〕法蔵館などがある。

※本紙での清沢満之研究会報告は年1回であるが、ホームページ上では年数回を予定している。

■ 第1回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4月22日）

親鸞仏教センターでは、開所1周年を記念して、去る4月22日、『aṅgali』や「現代と親鸞の研究会」などにご縁をいただいた、さまざまな専門分野で活躍されている有識者をお招きし、第1回「親鸞仏教センターのつどい」（第1部「おつとめ」、第2部「講演と交流懇談会」）を開催した。

第1部「おつとめ」では、センター仏間において勤行。その後、下谷泰史真宗大谷派参務（写真上）から「いよいよ3年目を迎えるセンターは、仏教思想を時代社会の関心の言葉で思索し、紡ぎ出そうとする設立の趣旨に立って、これからも、外側からの“現代の眼（まなこ）”をいただきながら、首都・東京で時代の風を感じ、学び、言葉を発信するという志願の具現化に向けて邁進していきたい」と抱負が述べられた。

第2部「講演と交流懇談会」では、会場を「学士会分館」（文京区・東大赤門隣）に移し、大学教授、医学、法曹、ジャーナリスト等、各界の有識者など約60名の方々のご出席のもと、「広大会（こうだいえ）に独り立つ」と題して、本多弘之所長（写真中）から講演があった。本多所長は、安田理深師の「人間のありかたとしての『孤独』と『独立』」というテーマにふれ、「現代は、共同体の閉鎖性をさせてひとりになろうとする。しかし、それは『独立』ということではなく、多くの人たちが自己喪失にまがっている」と指摘し、人と人がつながろうとすると妥協による閉鎖集団となり、自立しようすると結局は、孤立に終わってしまうという、現代の、特に顕著になってきた人間の持つ知恵の問題について言及された。そのうえで、「その解決には、個我を超えた柔らかな连带が必要であり、そこに本当の独立者が誕生する。独立者としてのいのちをいただきつつ、同時に、すべての人と根源的に连带していける人生の歩みをたまわる根拠を広大会」として示し、そこに親鸞仏教の積極性があることを力強く述べた。

引き続いての交流懇談会の席では、下谷参務挨拶、関根瑛應氏（日本仏教徒懇話会代表世話人）の祝杯（写真下）の後、有識者相互の交流会が持たれた。また、出席者を代表して國府田隆夫氏（東京大学名誉教授）、高橋紳吾氏（東邦大学助教授・日本脱カルト研究会理事）、坂東性純氏（元上野学園大学教授）から、センターの活動に対して激励の言葉をいただいた。

今後、センターでは、親鸞思想に依って立つ人間関係のつながりを求めて、毎年1回「親鸞仏教センターのつどい」を予定している。



親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 親鸞からあなたへのメッセージ —

あ と が き

先日、NHK ラジオで、「米国で、いま三種の神器（じんぎ）って何でしょう？」というアナウンサーの質問に、米国在住の邦人女性は、「そうですね、インターネットとクレジットカードとサブプリメントですね」と答えておられた。「インターネット」については、本紙前号でも述べたように、いまや爆発的增加を遂げていることから十分理解できる。次の「クレジットカード」は、生活の小さな買い物にも利用され日常化しているという。つまり、現金を持たないのである。クレジットは、借金を返済していける経済力をどれだけ持っているか、の社会的信用度を示すバロメーターにもなっているというのである。そして、最後の「サブプリメント（supplement）」とは、補足、補充の意味であるが、米国でも健康指向が高まるなか、食生活を変えずに栄養を補給するという、むしろ補助食品で栄養を採るというほど、健康食品が浸透しているということである▼いまから、約50年前の1950年代後半、日本では、いわゆる「家電三種の神器」といわれた電気洗濯機、電気冷蔵庫、

● センター新スタッフの紹介

嘱託研究員 常塚 聴

1973年生まれ。東京大学文学部思想文化学科卒業。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（宗教学）。

白黒テレビの出現は、戦後の貧しさと混乱した生活から、私たちの生活を豊かで快適な生活に変えた。当時、日本経済は高度成長期を迎え、産業界の好景気は個人所得の増大とその平均化をもたらし、生活様式の変化は、大衆消費社会に一層の拍車をかけた。そして60年代後半には、カラーテレビ、車、クーラーの「新三種の神器」が登場した。ここでのキーワードは、やはり「大衆化」ということであろうか。いまやケータイ、そして家庭用ロボットの開発……と。しかし肝心なのは、その大衆の一人ひとりが、果たしてどこまで本当に人生のよこびや生きる意味を見出したか、ということであろう▼大衆化とは、「いつでも、だれでも、どこでも」ということであろうが、人間が生きている事実は、いつも「いま、わたしが、ここに」という実存を離れてはない。これから「三種の神器」は刻々と変化していくであろうが、変わることのない人間の実存に、いつも真向かいになって生きていきたいと思っている。

（長谷岡）